舟入むつみ園

一　般　養　護

舟入むつみ園は、市内天満川の河岸・公園に隣接した静かなたたずまいにあり、しかも交通至便で広島市立舟入市民病院と隣接し養護ホームとしての環境にめぐまれており、昭和45年（1970年）4月に一般養護及び特別養護の併設施設として開設された。

現在は、平成5年（1993年）度の居住環境等の整備による全面改修により、入園定員100人の一般養護と定員4人のショートステイの施設として、また、送迎方式によるデイサービスも実施している。

所在地：〒730-0844　広島市中区舟入幸町14番11号
（TEL 082-291-1555）
（FAX 082-291-1854）

姉を置きざりに

青木俊之（七十九歳）

被爆地……河原町（爆心地より一・二km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……姉二人、姪、甥
現在の病状……気管支喘息・肺気腫高血圧性心疾患

被爆時の状況及びその後の生活

被爆当時、私は九才で、神崎国民学校の四年生、家は本川橋と住吉橋の中間の土手にあり、姉四人、姪、甥、母と私の８人で住んでいました。

その日は、朝から鋸を使って木を切っていました。その時、窓が一瞬異常に明るく光り、目に焼きつき、その後は記憶にありません。

気がついたら、家の真中で、膝から下を埋めて立っていて、這い上がると三百六十度見渡せる展望が広がっていました。周りには、誰もいませんでした。

私の声を聞きつけて、脛肉を深く削り取られた母が、家の下から這い出てきました。その少し奥に、二十一才の姉がいて、「足を押さえている材木を切れば出られるので、鋸を取ってくれ」と言ったので、鋸を探しましたが、見当たりませんでした。そして、もう一人の十五才の姉が、はらわたを出して、「水をくれ」と呻いていました。私が防火水槽から汚れた水を瓦ですくい取り、母が飲ませましたが「のどを突いてくれ、殺してくれ」と叫びました。

周りに火の手が見えてきたので、私は母の手をひっぱってそこから逃げ出しました。住吉橋の近くに雁木があり、そこに避難しましたが、川の水は濁流で、木材に混じって、人、牛、馬などが流されていました。

結局、母と姉二人と私が生き残り、二十一歳と十五歳の姉二人と甥、姪は行方不明になりました。

あの時まだ生きていて苦しんでいる我が娘を置いて逃げざるをえなかった母の気持は、想像に絶するものがあります。母もそれから十七年後、骨髄腫で亡くなりました。

原子爆弾投下について

雨森鶴江（九十八歳）

被爆地……千田町（爆心地より一・五㎞）
当時の急性症状……火傷
家族の死亡……父
現在の病状……変形性脊椎症・高血圧症・高脂血症・変形性膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

あの時、私は、病で床に臥せっていた両親に薬を飲ませている時でした。瞬間の出来事で訳も分からず駆け出し、しゃがみ、目と耳を覆いました。暫くして、顔を上げて見ても砂埃で何も見えず、庭に居ることにも気づきませんでした。父は土壁の下敷きになり、母は頭に硝子が刺さり掛布団ごと焦げた状態でした。

家具等が散乱し足の踏み場もない中、両親を電車道まで運び、軍隊のトラックで宇品に行き、そこから似島に避難しました。避難中、黒焦げで横たわる人の様子を見て、

惨劇の酷さから只事ではないと改めて思いました。

似島の検疫所に着き、そこで一家の落ち着く場所が決まり、やかんにお茶を入れ、戻ってこれたことに安心した途端に動けなくなりました。

自分の体を見てみると、右の頭の上から左手・左足と火傷をし、左足は二倍に膨れ上がっており、驚きました。火傷は後遺症となり、日光があたると日焼けのようになり、左膝は曇りでも痛みとかゆみを繰り返しました。父は、水を飲んでもむせるほど衰弱し、まさに骨と皮で、腹部は臓もつが山のようになり、九月になって亡くなりました。

その後の私は、体の不調を感じつつも生活の為に職を探し、十二月末には地御前で母と二人での新たな生活を始めました。後遺症は十年程前まで続きましたが、現在は普通に暮らせるまでになりました。

決して、このような戦争を起こしてはいけません。人類や地球を破壊する兵器を、造らせてはなりません。全世界が平和で、笑顔に送れる世の中を願いつつ、若い方々にも心して頂きたい気持ちでいっぱいです。

平和な今、忘れてならぬこと

石井綾子（七十八歳）

被　爆　地……己斐町（爆心地より二・五km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……高血圧症・変形性膝関節症・甲状腺機能低下症・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

私は九歳で、三月に旧満州より広島に戻った年でした。学校はありましたが、学童疎開で、残っている学友はわずかでした。

近所の数名と旭山神社に集まって、先生の点呼を受け終わった瞬間…。気を失い三時間ほど経った頃、名前を呼ばれたような気がして、我に返った時には、建物の瓦礫に囲まれた床下でした。

そこから這い出し、目に入ったのは、焼け焦げた布を纏ってはいるもののほぼ裸で、髪はボウボウ、目玉だけギョロギョロと動き、手の力はなく、指先から赤黒い皮膚が

筋を引く人の姿でした。そうした大人や子供がゾロゾロと続いて、道を埋めていました。

人々の「大丈夫か？」との声の中を進み、家にたどり着きました。大家さんが怪我はないかと労って下さり、普段口に出来ないような白米や肉の缶詰を食べさせてくれました。

ひと息つき、家族の安否が気になりましたが、幸にも、家族の無事は夕方までには確認出来ました。しかし、本家の伯父が消息不明で、翌日、伯父を探しに市の中心地に出掛けました。

橋が落ちていたので、川の浅瀬を歩きました。すると、人の髪の毛がまとわりつき、裸の人が大勢浮いていたので、驚きました。

それらを右に左に避けながら、岸にたどり着くと力尽き歩けなくなりました。伯父を見つけられず、途方に暮れて線路を枕にして寝ました。人の呻き声と悪臭の出ている死体の近くで朝を待ったことを思い出します。

その後、「ピカドン」のことは思い出すのも嫌で、誰にも話すことは出来ませんでした。

今は、なに一つ不自由のない時代になり幸せを感じています。「平和の原点は人の痛みをわかる心を持つこと」と、どなたかの言葉を心に刻み、今、生活しています。

私の八月六日

江島　マサ子（八十七歳）

被　爆　地……牛田町（爆心地より二・三km）
当時の急性症状……裂傷
家族の死亡……なし
現在の病状……気管支喘息・高脂血症・甲状腺機能低下症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、女学校しか出てない私でしたが、京都の同級生が先生になったのにならって、先生になりました。昭和十九年十月から瀬野小学校に勤め、十九歳になった翌年の四月から牛田小学校に転勤し、一年生を受け持っていました。

その朝、牛田小学校に出勤し、職員室で事務の方の結婚写真を見ていました。八時十五分頃、急に青と黄色の凄い閃光が走り、一瞬気を失ってしまいました。

校舎の屋根瓦が落ちてきたため、頭を五ヶ所、左肘を数ヶ所そして左中指を怪我しまし

た。白の半袖のブラウスが真紅に染まっていたことにも気づかず、受け持ちの一年生一人とほかの子供四、五名と牛田の山に逃げました。

今なら我慢できない痛みも、その時は戦争に勝つためと一生懸命我慢しました。人々は皆無口で、兵隊さんの云う事を聞いて、蟻の行列のように黙々と歩いて避難しました。トラックに乗せられて運ばれて行く人の中には、髪は逆立ち、唇は腫あがった人もいました。

避難先では、東練兵場の兵隊さんと共に手当をしてもらいました。その兵隊さんは、上半身裸で皮膚が桃の皮を剥いたように垂れ下がっていました。道端には水を欲しがる人が多くいましたが、「水をあげると死ぬ」と止められていました。

死骸が饒津神社の横までいっぱいある中を、恐ろしいとも思わず歩いて帰ったことを今でもはっきり覚えています。

その後の私は、米のとぎ汁のような便が二週間ぐらい続き、髪も少し抜けました。また、薬が無いので庭の柿の葉を煎じて飲み、足の三里に灸をすえ、半年間寝込みました。今にして思えば良く生きてきたと思います。

看護の日々

胡　子　キヨ子（九十三歳）

被　爆　地……入市（八月七日・基町）
当時の急性症状……下痢
家族の死亡……なし
現在の病状……右義眼・左眼老人性白内障・甲状腺機能低下症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は二十四歳で基町にあった広島第一陸軍病院で、見習い看護婦として勤めておりました。昭和二十年七月二十五日、第一陸軍病院より、軍隊に復帰する患者さん二十人を連れて、婦長一人、私を含む看護婦三人とで、飯室の小学校へと疎開しました。数日そこで過ごし、八月五日に退院する患者さん十二人を連れて、広島に戻りました。

八月六日の朝に飯室へ戻る予定でしたが、急遽、八月五日の夜に戻った為、私達は

無事でしたが、私達と交代で広島に出た看護婦三人が亡くなりました。

八月六日の朝、原爆が落とされた時、ピカッと光り、きのこ雲が飯室からも見えました。

八月七日、看護の為、基町に行きましたが、第一陸軍病院に辿り着けませんでした。その後、戸坂小学校へ疎開していた第一陸軍病院の分院へ向かいましたが、可部小学校に疎開していた本部から、急いで飯室へ帰ってこいという連絡があったので、戻りました。

そこには、二、三十人の患者さんがいて、手から皮膚がぶら下がり、傷口には蛆が湧いた人が沢山いまし

広島第一陸軍病院正門付近

広島第一陸軍病院第一分院北西隅から北に向って。木造の全病棟は、爆風と熱線で瞬時に壊滅。それぞれの建物の基礎だけが残った。明治初期広島鎮台病院と呼び、太田川畔の小姓町に移って広島衛戍病院と呼称。1937(昭和12)年に広島陸軍病院と改称。被爆時院長は元吉慶四郎少将。
(川原四儀氏撮影／広島平和記念資料館提供)

た。「水、水」という人へ水を飲ますと、二、三時間後には亡くなっていったので、水を欲しがっても飲まさないようにしていました。それでも、一日に五人位の方々が亡くなり、ひどい時には、二十人の人が亡くなりました。遺体を焼くのは、村の人々が田んぼでして下さり、お骨は、「かます」に入れて看護する者がいた部屋へ入れておきました。

家族が遺骨を取りに来られると、誰のか分からない遺骨を封筒に少しずつ入れ、それを桐の箱に入れて渡しました。取りに来られた家族の方々へ遺骨が行き渡らない為、少しずつしか渡すことができませんでした。遺族の方々も、身内のお骨でないとわかっていても、持ち帰っていました。

その後、鈴張、亀山、飯室の分院を閉鎖、可部小学校へ疎開していた第一陸軍病院は山口県柳井市の井保庄へ移転することとなりました。私はそこで少し勤めましたが、皆が辞めていき、私も辞めました。

その後、親戚の食堂の手伝いをして、三十歳で結婚しました。現在は、むつみ園でお世話になっています。こういった辛い経験が、二度と起こらないよう祈っています。

小学二年生の体験

太田　喜世子（七十七歳）

被爆地……祇園町（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……糖尿病・気管支喘息

被爆時の状況及びその後の生活

昭和二十年八月六日、私は祇園小学校の二年生でした。あの当時、夏休みは無く、学校に行っていました。

その日は、天気も良く、一・二年生は、運動場で遊び、三年生以上は、教室の掃除をしていました。

この普段と何も変わらない朝が、八時十五分に一変しました。急に、ものすごい風が運動場に吹き込み、地響きのような音が鳴り響きました。私たち一・二年生は、慌

てて校舎の中に駆け込みました。

校舎に入り、廊下まで行くと、教室の窓ガラスは割れ、運動場に避難しようとした中高学年と校舎に避難しようとした低学年とが入り乱れ、廊下は、逃げ惑う生徒たちで混乱していました。

兵隊さんの「かがめ、かがめ」と言う必死な叫び声が聞こえ、恐怖の中、一時を過ごしました。爆風が収まったところを見計らい、先生から全員家に帰るようにと指示があり、一年生から六年生までの集団下校となりました。

皆、自然と駆け足になり、誰も一言もしゃべらず、必死な形相で、周囲に目もくれず、それぞれ家に急ぎました。

いつも通る道が長く感じ、ようやく家に着き、見ると家のガラスも壊れており、慌てて家の中へ駆け込みました。すると、母が妹を抱きかかえるようにして、頭から布団を被りうずくまっていました。

その後、市内から横川を抜けて、避難してくる人が道に溢れていました。その道を往く人たちは、ひどい火傷や怪我をしており、苦しそうな声で「水をくれ」と言いながら歩いていました。

その人達の中には、途中で力尽き、道端に倒れこむ人やそのまま息絶える人もあり

ました。その光景は地獄絵図のようで、未だにその光景は思い出され、恐怖が呼び起こされます。

近くのお寺や神社には、怪我をした多くの人が運び込まれ、お世話をする人が集まり、次から次へと治療や看病をしていました。まだ幼かった私は、その光景が恐ろしく、遠くから見ることしかできませんでした。

八月十五日、戦争が終わったことをラジオで聞き、幼心に「もう爆弾が落ちることもなくなる」、と嬉しく思ったことを今でも憶えています。

今の平和な日本が、長く続くことを心から願っています。

横川方面と横川駅を北東から西南に望む

爆心地から約1800m。横川駅は爆風倒潰、上下線をまたぐ陸橋が残る。

（川本俊雄氏撮影／川本祥雄氏提供）

原爆体験記

大政　寛（八十六歳）

被　爆　地……国泰寺町（爆心地より一・〇km）
当時の急性症状……打撲・手の裂傷・脱毛・下痢・出血
家族の死亡……なし
現在の病状……狭心症・メニエル症候群・慢性気管支炎

被爆時の状況及びその後の生活

四人兄弟の長男の私は、当時十六歳でした。市役所で働いていた父の元に弁当を届けに行き、市役所の地下食堂でその時をむかえました。

ピカッと光ったと同時に爆風で身体がコンクリートに叩き付けられ、左手に硝子の破片で傷を受け、気を失ってしまいました。

私は、父に助けられ、市公会堂の池の横に運ばれた状態で暫くして気が付きました。その時見た光景は、この世の地獄のようでした。

人々は、酷い火傷を負い、その顔は男女の区別がわかり難い程で、二度と見られる有様ではありませんでした。

幸いにも、小学校へ行っていた上の弟、南蟹屋の自宅にいた母、下の弟、妹は、怪我等はあったものの無事でした。

その後は、父と共に原爆の後遺症に苦しめられました。父は病気を繰り返し、ついに仕事に復帰することもかなわず、昭和二十九年十一月二十日に亡くなりました。その身体は比治山にあるＡＢＣＣ（現・放射線影響研究所）で献体となり、現在も研究のお役にたっているそうです。私としては、その研究のデータを知りたいと願っております。

家族も相次いで癌などで亡くなり、今では下の弟と二人だけになってしまいました。

私は、舟入むつみ園に入所出来ましたが、未だに八月六日の月曜日のことを思い出すと怖くなります。そして「八月六日」と聞くと頭が痛くなり、食事が摂れなくなります。体調を壊すので、話したり書いたり等も出来ません。

戦争で、原子爆弾を使うことなど全然知りませんでした。戦争は嫌です。もう絶対に、人を殺すことのないように願います。

一九四五年（昭和二十年）八月六日について

岡田　敏夫（八十歳）

被爆地……千田町（爆心地より二・〇km）
当時の急性症状……頭部外傷
家族の死亡……なし
現在の病状……高血圧症・自律神経失調症・胃炎・過敏性腸症候群・アレルギー性鼻炎・前立腺肥大症・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

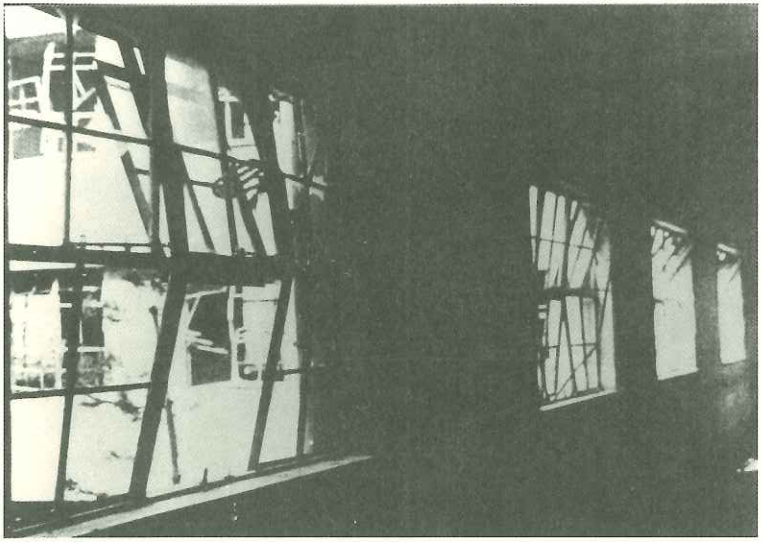
一九四五年七月に連合国側はポツダム宣言を発表したが、大日本帝国政府はこれを無視したので、米軍空軍機は人類歴史上初めて広島に一発目の原子爆弾を、また、八月九日には長崎へ二発目の原子爆弾を落としました。

八月六日当日、国民学校（現在は小学校）は夏休み中であった。私は両親の言いつけで、病気であった妹（二歳）の薬をいただくために、広島赤十字病院に行き一階待合室のベンチに座っていた。

午前八時十五分、突然、音もなく部屋全体、否、地球全体が青白色に「ピカー」と光ったように見えた。特に鋭い光がしたのは西練兵場の方向であった。

すると暫らくして、窓ガラスは割れ、家具は飛び、天井は落ち、壁が崩れ、あたりは真っ暗になり、私は気を失った。

気がついたときはそれらの下敷きになっており、暫らく体を動かすことができなかった。周りは、シーンとして「人気」は全くなかった。無我夢中で死にもの狂いで、体の上に乗っていた十歳の子供には重い天井板、いす、家具などの瓦礫を取り除



広島赤十字病院内

爆心地方向の窓枠は爆風によって内側へ鉄枠を押し曲げる。突き当たった爆風は別の窓の鉄枠を外側に曲げる。爆心地から南東に1500mの広島赤十字病院の北側廊下の窓枠。（斎藤誠二氏撮影／広島平和記念資料館提供）

き、何とかそこから抜け出すことができ、屋外へ飛び出した。

すでに、紙屋町方面は火の手が上がり、その火の勢いが強かったので、大人たちについて住吉橋の袂に逃げた。周りの火勢が衰えるのを待ち、鷹野橋から紙屋町方面に向かって路面電車通りを歩いた。

真夏ではあったが、シャツは破れ上半身裸、履物を失い裸足であった。また、頭部に手を当てると指に血がついていた。

白神神社付近まで来ると、まだ火勢が強くその先へは進めなかったので、御幸橋方面に引き返し、御幸橋を渡り比治山線を通り広島駅に向かって歩いた。周囲の倉庫群は火炎を上げて燃え上がっていた。

広島駅前から饒津神社前を通り牛田の自宅に辿り着いたときは、長かった一日も終わり周りは薄暗くなっていた。もちろん、自宅は全壊だった。そこで近くの山麓にあった見知らぬ農家の軒先で二晩ほど過ごし、夏休みが終わるまで親戚のあった上下町に避難した。

私の体験は以上であるが、この原爆投下のため両都市合わせて数万の無辜の人々が即死し、光線、熱線、放射線を浴び、猛火を逃れて生き延びた人たちも、地獄の苦しみを味わった。

ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ウォー、ネヴァー・アゲイン。

十一歳の夏

落窪敏子（八十一歳）

被　爆　地……中山村（爆心地より四・〇km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……喘息・白内障・高血圧症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は、中山村で、祖父母や叔母、兄弟の十人の大所帯で暮らしていました。私は、小学五年生で、十一歳でした。八月六日の朝はとても天気が良く、中山小学校へ藁草履を作りに行っていました。

校庭でピカッと光り、ドーンと音がして、怖くなり伏せました。起き上がって空を見上げると、B29が北の空へ飛んでいきました。

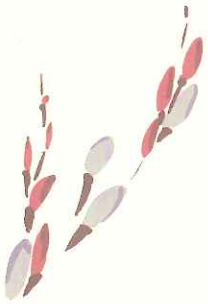
すぐに山に逃げるように言われましたが、それが先生だったのかは定かではありま

せん。逃げていたら、空は真っ暗になり雨が降り出しました。

山を降りて家に帰るよう言われたので、帰ったら、家は、爆風で欄干が落ち、ガラスが割れて大変でした。幸いなことに、私をはじめ家族は皆無事で、ケガをした者もいませんでした。

家の片付けをしながら、毎日のように小学校へ行きました。そこで見たものは、服は破れて肌が見えるほど無残な姿となった人達が、水を求めながらゾロゾロと歩いて小学校に辿り着く光景でした。また、子供は、「痛い、痛い」と叫んでいました。戸板に乗せて運ばれ、大八車で集められ、山のようになった死体が焼かれて、毎日のように異様な匂いがしていました。

今、私達は、むつみ園で幸福な暮らしをさせて頂き感謝しています。若い人にこの苦しみを伝えることで、二度と戦争が起きることがないよう願っています。



原爆の日は静かに祈りの日

香川冨子（八十九歳）

被爆地……千田町（爆心地より一・五km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……母
現在の病状……甲状腺機能低下症

被爆時の状況及びその後の生活

昭和二十年八月六日八時十五分、私と妹は勤務先の広島貯金支局で、母は舟入町の自宅で被爆しました。

もの凄い光と音が鎮まるのを待って外に出てみると、変わり果てた町の様子に驚きました。電車は黒く焼け、人は衣類を剥がれ、皮膚は赤身と化していました。

私達は、家に帰りたい一心で鷹野橋方面に歩きましたが、そこは既に火の海になっていたため、大河方面に逃げ、避難所で一夜を過ごしました。

途中の道々の瓦礫の下から、黒く焼け爛れた顔を覗かせて、「助けて」「連れて逃げて」と叫ぶ声が聞こえましたが、何も出来ないまま通り過ぎてしまいました。

翌日から、焼け野原の街を、母を探して歩きました。相生橋を渡るときは、川には多数の遺体が浮かんでいました。江波の避難所では、腕から背中にかけて皮膚が剥がれ、赤身の肌にハエがたかり、蛆虫がウヨウヨしている姿もありました。ごま塩と見間違えるほどハエのたかったおむすびも食べました。

今日まで生きてこれたことは、不思議に思えてなりません。当時は、百年は草木も生えないと言われた広島。「核」と言う恐ろしい人間の作ったもので、二十万人の尊い命が奪われたことは、決して許されることではありません。

私は、子孫に伝えていかなければならないと思います。

八月六日、「原爆の日は、静かに祈る日」と私は考えています。

忘れられない恐怖心

亀井紀子（七十三歳）

被　爆　地……祇園町（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……裂傷
家族の死亡……なし
現在の病状……慢性心不全・慢性気管支炎・両下肢閉塞性動脈硬化症

被爆時の状況及びその後の生活

原爆投下された八月六日、私は、家の裏庭にあった池で、手に虫取り網を持ち、弟と二人で、鯉に悪戯をして遊んでいました。

その時、急に背中が熱くなるのを感じたかと思うと、「こっちに来なさい」と母の叫び声が聞こえ、その声に驚き、弟と二人で家に駆け込みました。

家に入り、母が私と弟を抱きかかえると同時に、凄まじい爆風が家にぶつかり、家中の窓がギシギシと鳴り、ガラスが割れて部屋中に飛び散りました。

母は、爆風により、倒れこむように私たちに覆いかぶさり守ってくれていました。

私は、何が起こったのかと顔を上げてしまい、左眉辺りにガラスが突き刺さり、後に、隣のおばさんに「のりちゃん、ガラスが刺さっているよ」と言われるまでは、気が動転してか、痛みは感じませんでした。家から道路を見ると、市内から火傷を負い、ボロボロの服を着た大勢の人たちが、山の方に向けて歩いていました。

その人たちが、「水をちょうだい、水をちょうだい」と苦しそうな声で訴えていた情景は、幼心に怖い気持ちでいっぱいでした。私は、今

相生橋

元安川左岸下流側橋詰めから西に向って。爆心地に近いにもかかわらず相生橋下流側の欄干は、外に傾いたが落下はしなかった。上部の建物は本川国民学校。
（川原四儀氏撮影／広島平和記念資料館提供）

でも目を閉じればその情景を思い出し、忘れることはできません。

仕事に出ていた父は、原爆が投下された時、あまりにもひどい熱さのため、相生橋から川へ飛び込んだそうです。しばらくして家に帰ってきましたが、その姿は、火傷を負い、顔や腕や胸に水膨れができており、直ぐには父とは判別できないくらいでした。

母は、父を見て直ぐに、じゃがいもをすり潰し、熱を取るため火傷の部分に塗り、献身的に看病を続けていました。そのうち、父の傷口にうじ虫がわき始めたので、蚊帳の中に移し、母と私で、虫をピンセットで必死に取ったことは、今でも思い出されます。

この原子爆弾により、多くの方が被害にあわれましたが、私自身は運が良かったと思うようにしています。

今でも、後遺症などに苦しんでいる人を見ると、戦争の恐ろしさ、核兵器がもたらした悲劇を痛感し、二度と戦争を起こしてはならないと心から思うと共に、世の中は不公平だなと痛切に感じます。

私は、生かされた命を大切に生きていきたいと思っています。

原爆キノコ雲

川崎哲子（八十四歳）

被　爆　地……救護（五日市町の石内浄土寺）
当時の急性症状……下痢
家族の死亡……なし
現在の病状……白内障・高脂血症・変形性膝関節症・腰椎狭窄症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、女学校三年生だった私は、学徒動員で観音三菱重工業に行っておりました。八月六日は、祖母が病気になり、母から面倒を見てくれるようにと言われ、学校を休んで家におりました。母は石内国民学校の教師で、夏休みを返上して学校に行っておりました。

朝の片付けが終わった時、ピカッと物凄い閃光が走り、ドカンと大きな音と共に爆風で障子が倒れ破れました。山の向こうにどんどん広がる大きなキノコ雲が見え、此

処にも爆弾が落ちると思い、祖母の手を取り裏山へ逃げました。
暫くするとB29が空高く飛び去っていくのが見えたので、家に戻りました。黒い雨が降り始め、小降りになると空から新聞紙の焼け切れや灰がパラパラ落ちてきました。二人の妹達も帰宅し、夕方遅く母も帰宅して、お互いに怖かった様子を話し合いました。

県道を、髪も衣服もボロボロになり、両手を垂らした人が昼前から歩いておられ、夕方頃から大勢の負傷者が浄土寺に運ばれたと母から聞きました。

八月七日は、早朝より浄土寺へ炊き出しや救護に行くよう言われ、近所の人と一緒に行きました。本堂は足の踏み場もないほど人が寝かされ、呻き声や異臭がして悲惨な状況になっていて、驚きました。顔は腫れ上り、目が光って動いていたのを鮮明に覚えています。焼け爛れた皮膚を拭いてあげたり、か細い声で話されるのを聞いて慰めてあげたりしました。

乳飲み子を胸に抱いたお母さんが、「今、この子は動かなくなりました」と言われた時は、胸が詰まって涙が出てきました。

年老いて、終の棲家・むつみ園に入園し、職員の皆様に暖かく見守って頂だき、此の上ないことと感謝の念でいっぱいです。

二度と核兵器が使用されないよう、世界の平和を願っております。

忘れられない八月六日

川又幸子（七十八歳）

被　爆　地　……　舟入川口町（爆心地より二・二km）
当時の急性症状　……　鼻血
家族の死亡　……　叔母
現在の病状　……　高血圧症・洞不全症候群・左肩関節腱板断裂

被爆時の状況及びその後の生活

遠いあの八月六日、朝から陽射しの強かったように覚えています。私は、一ヶ月前の七月に下関で空襲にあい、家族で広島の母方の祖母の家に引っ越していました。当時は、広島でも皆さん疎開しておられ、一クラスの人数は少なかったように思います。

当時、私は三年生（八歳）で、六日は校庭で朝礼をしていました。小柄なので一番前に並んで、台上におられた先生のお話を聞いていたら、突然オレンジ色の光が「ピカ！」と光り、爆風が襲ってきました。何事が起きたのかわからないまま、朝礼台横

の柳の木の下に走りました。

そして、子供達は泣きながら、崩れた校舎をくぐって、素足で校外に出ました。私は、校門の所で、一緒に住んでいた従弟に出会い、鼻血で赤く染まったワンピースの裾で涙を拭きながら、二人で家に帰りました。

家では母が屋根の下敷きになり、祖母が近所の人に助けを求めていました。元気な男の人がいなくて、七十歳位の近所のおじいさんが、倒れた柱を屋根との隙間に入れ空間を作って、母を助けて下さいました。

それから、家族で親戚の家（井口村）へ避難しました。観音から己斐の処で、お腹の大きい女の人が血を流していましたが、私達も避難の途中でしたから、そのまま通り過ぎてしまいました。

後に、母が健在の時には、そのことを何時もみんなで話していましたし、今でも、忘れることはできません。

あれから約七十年、子供の頃は大きいと思っていた原爆ドームは、周りのビルに囲まれて小さくなったように感じます。いつまでも、平和都市広島であることを願っています。

少女時代只一つ残る思い出

北川　靜伊（八十四歳）

被　爆　地……入市（八月十八日・鍛冶屋町）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……慢性腎不全・高尿酸血症・高脂血症

被爆時の状況及びその後の生活

私が十五歳の時、向原高等女学校在学中で、学徒動員として広海軍工廠鋳物実験部で働いていました。働いた期間はよく覚えていません。

八月六日、広島の方からピカっと光って、「何だろう。大久野島の毒薬庫が爆発したのだろう」と言う話も聞きましたが、広島に「ピカドン」が落ちたそうな。と言う話が伝わって来ました。

八月十五日に終戦となり、翌日、向原へ帰りましたが、町の中では怪我をした人や

親戚を頼って来た人達がいっぱいでした。

その後、私は本川小学校へ行くように言われ、広島市内で看病など色々しました。お粥を大きな鍋で炊き、綺麗に洗ったバケツに入れて、枕元にある茶碗の中に配ったりしました。教室の床が落ちて、土の上にむしろを敷いて、多くの人が横になり寝ておられました。私達がお粥の入ったバケツを持つ姿を見ると、嬉しそうに笑顔でニコッとされていました。

朝行くと、夕べまでは話をする力があったのに、死んでいった人も沢山おられ、十五、六歳の私達には、本当にショックが大きく、どうして良いか分かりませんでした。遺体を「井」の字形に重ねて、倒れた家屋の木を拾って来て、それで焼いていましたが、その臭いが何とも言えませんでした。

夜の街に、所々火が燃えていました。それは遺体を焼いている火でした。ああ、今日もまた、誰かが亡くなられたんだと思い、手を合わせて、心より御冥福を祈りました。

二週間ほど本川小学校にいて、向原の家に帰りましたが、遺体を焼いた臭いが身体にしみついて、しばらくはたまらなく嫌でした。

昔は、食べ物も少なく粗末なものしかありませんでしたが、今では、好きな物を食べられ、欲しい物は買える時代が来て、本当に幸せなことだと思います。

戦争の思い出

木本　美智子（八十五歳）

被　爆　地……東白島町（爆心地より一・五km）
当時の急性症状……吐き気・下痢・打撲
家族の死亡……祖母・父
現在の病状……骨粗鬆症・めまい・高血圧症・貧血

被爆時の状況及びその後の生活

私は当時女学校四年生で、海田の日本製鋼所に行っていました。八月六日の朝は休みで家におり、空襲警報で防空壕に入りましたが、何もなかったので家に帰りました。それから、B29の音がして家の中から空を見たら「ピカッ」と光り、目の前が一瞬白くなった後黄色くなり、私は気を失いました。

気付いた時には、家の下敷きになっていて、大きな木が腰の上に落ち、身動きもできず、声も出ませんでした。

母は、外出しようと家の前にいた時に、瓦が頭に落ちて、血が顔まで流れるほど怪

我をしていました。それでも、頭をタオルで縛って、バケツで水をかけて、周りの火を消していました。

母は、私の体の上にある土や竹を手で取るように私に言いましたが、なかなか取れませんでした。それから、元気に帰ってきた弟（小学生）と母が、土や竹などを取り除いて私を助け出してくれました。腰から下は白くなるほど血の気がなく、歩くこともできず、二人に肩を持ってもらい、家の裏の空き地に逃げました。そこに座り込み、足をさすってもらっていたら、火の手が来たので、更に、縮景園の近くの川まで逃げました。

川へ同じように逃げてきた人達は、着ている物、髪の毛、顔や身体も焼けていました。そして、皮膚が垂れ下がり、赤い身が出て、男か女か分からないほどでした。川の中は、人がいっぱいで、「水をください。お母さん助けて」と言いながら、流されて亡くなる方もいました。

川の中にいた私達三人は、流れてきた大きな木に摑まっていたところを、近所の人に助けてもらいました。その時、空が暗くなり黒い雨が降り始めました。河原から雁木を上り、三人寄り添って一夜を明かしましたが、朝になると、周りにはたくさんの人が亡くなっていました。

七日に、叔父が私達を探しに来て、焼けていない祖父の家に連れて行ってくれました。

父は幟町小学校で被爆し、八日に祖父の家にきましたが、髪は焼け顔や手に火傷をして、着物はボロボロになり、蛆虫がわいていました。薬がないので、アロエ、芋を擦って貼り、赤チンを付けましたが、良くならないので、戸坂小学校の軍の病院に荷車で連れて行ってもらいました。父は、八月二十三日に亡くなり、叔父にお願いして、戸坂の山の下で火葬しました。

祖母は縮景園へ勤労奉仕に行っていたので、母が探しに行きましたが、「九日に亡くなり、園内の高い所に、亡くなった人を集めて埋めた」と言われ、そこの土をハンカチに包んで帰ってきました。

九月には、母が病気になり、高熱・下痢・歯茎からの出血などの症状が二か月間続きました。私は、不安になり、母が亡くなったら弟と二人で死のうとまで考えていました。

原爆が投下された後の私が目にしたものは、すべてこの世の地獄のようでした。また、戦中戦後は、衣食住に困り大変でした。

今は、むつみ園で平穏な生活を送っています。平和学習に来られる学生さんに、被爆体験の話をしていますが、話をするといつも涙が出てきていけません。いつまでも、平和な国でありますように願っています。

六十九年前に被爆した思い出

桑本　晞三（八十四歳）

被　爆　地……南観音町（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……祖父
現在の病状……脳梗塞・高血圧症

被爆時の状況及びその後の生活

当日、私は中学二年生で、学徒動員され南観音町の三菱に勤めておりました。突然大きな爆弾が落ち、広瀬方面まで避難したところで黒色の雨にあい、横川北方面まで来たところで煙に巻かれたので防空壕に避難しました。そこから猿猴橋町の家に帰る途中常葉橋にかかりますと、橋の両岸に火傷で皮膚がぶら下がり、衣服がボロボロになり、又黒くなった、たくさんの兵隊が倒れていました。そんな状態が、二葉の里から東練兵場まで続いておりました。東練兵場を過ぎて、家に帰りましたが、家

は焼け落ちていました。

家族は府中町の親戚に行っておりました。

猿猴橋町地区の避難所は、芸備線沿いの狩留家でした。二・三日後、汽車が動いたので、隣のおじさんと矢賀駅から鈴なりの汽車に乗って行きました。

避難所となっていた狩留家の小学校では、火傷して腕の皮膚がはがれ血管にウジがいる姿を見て、茫然とし地獄絵そのものを見るようでした。

このような爆弾は使ってはならないと強く感じました。

また、祖父母が京橋町にバラックを建てましたので、私はそこに泊まり、猿猴橋町にいた被災者のお世話を近所の人と三人で致しました。

その後、祖父は、「奇病」で十月はじめに亡くなり、後になって「原爆症」と判明しました。死体を、祖母と二人で焼け残った防空壕で火葬し、お骨は牛田町の万景寺に納めました。

世界に広まりつつある核兵器に強く反対し、人間の安全、命の大切さを守り、核兵器を無くするように努めたいと思います。

思い出したくない体験

近　藤　ヒナ子（八十七歳）

被　爆　地　……　西蟹屋町（爆心地より二・五km）
当時の急性症状　……　なし
家族の死亡　……　なし
現在の病状　……　肺気腫・腰痛（ヘルニア）

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は広島陸軍兵器補給廠輸送課に勤務していました。八月五日午後九時過ぎ、警戒警報になり、急いで勤務先に行きました。幸に、二十分余りで解除になり家に帰りましたが、途中、ガソリンの匂いが鼻につき不思議に思ったことを、今でも覚えています。

翌朝八時十分頃、妹の「B29が飛んで来た」の声で、二階の窓から見ている時です。青白い光が部屋中に広がり、ドーッと地底から突き上げるように体が天井に当たり、瞬間に気を失いました。

しばらくして、ゴーっという音で気が付き、母や妹弟のことを思い、階下に降りま

した。

私は、母を箪笥の下から、妹を階段と建具の下から引っ張り出しました。弟は、分散授業のあった荒神市場から、背中に火傷、頭に切傷を負い、顔中をまっ赤にして帰ってきました。

それから、母達は東練兵場へ、私は急いで勤務先へと、別々に家を後にしました。荒神橋は多くの残酷な人の波で、一人だけ五体満足な私には、まるで悪夢の中に入っているとしか言いようのない光景でした。

そこに、輸送課のトラックが通りかかり、見かけた私に「救護に当たるように」と言われました。その場から動ける人を救護して、海田市分廠の空倉庫に連れて行くようにと軍医に命令され、十回以上市内の火災現場を迂回しながら、夜通し救護に当たりました。

三日後、四日後と負傷者数も多くなり、又、死者の数も加速して増え、自分の頭が変になったように思える程でした。

死に水を取らせて戴いた人々の数も知れず、亡くなった方々を並べて、火葬する手伝いをするたびに涙が流れました。

また、上官から、長崎でも被爆者が出たことを聞きました。

人は、戦争することがこんな残酷なことになると分かったうえでしたのでしょうか。皆さんにはどうか、今の平和な毎日を忘れることのないよう、祈ってやみません。

私の原爆体験記

堺　信子（八十四歳）

被　爆　地……千田町（爆心地より一・七km）
当時の急性症状……裂傷
家族の死亡……兄
現在の病状……変形性脊椎症・貧血・変形性膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日の朝は学徒動員が休みでしたが、校長先生に会うために皆で学校に集まるよう担任の先生に言われ、教室で待っていました。

突然、電気をパッと付けたように明るくなると同時に、衝撃でガラスが一斉に割れました。皆で校庭に避難する際、ガラスで足を切りましたが、何とか難を逃れることができました。

先生に「それぞれの家が心配だから、家に帰りなさい」と言われ、家を目指しました。

道路に建物が倒れて道が通れない中、瓦礫を登り、屋根を越え、やっとの思いでたどり着いた我が家は傾いていました。

居るはずの母を探していると、近所の方から近くの川に行ったと教えられ、すぐに向かいました。母は、多くの人の中で熱さからかシミーズ一枚で川に浸かっていました。

それから、母と共に傾いた家から使えそうな物を探していましたが、火が近づいて危なくなり共に防空壕に避難しました。翌日、戻ると、奇跡的に家は焼けずに残っていました。

父が既に戦死していたので、私達の頼りは十七歳離れた兄でした。当時、兵隊で練兵所にいた兄は、被爆後の救護などに当たっていましたが、数日後、可部の小学校で無事を確認することができました。

それから一週間後に兄が戻り、傾いた家の柱を直し、三人で再出発しようとした矢先に兄は体調を崩し、寝込んでから半年ももたずに亡くなってしまいました。

母と二人きりになり、何とか戦後を生き抜いてきましたが、その母も亡くなり、今年で二十七回忌を迎えます。私は、縁あって舟入むつみ園に入ることになりました。今はあの家はありませんが、あの頃の情景と感情は忘れることはありません。

あの頃

菅　喜代子（八十八歳）

被　爆　地……福島町（爆心地より一・八km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……高血圧症

被爆時の状況及びその後の生活

昭和二十年八月六日、私は十八才で、ちょうど通勤途中の電車に乗っていました。当日の朝、私は腹痛があり、出勤するのがいつもより遅くなり、原爆投下時に乗っていた電車が、たまたま福島町の民家の間にいたため、大した怪我もしないで済みました。

福島町の電停の前後には鉄橋があったので、もし電車が鉄橋の上にいたとしたら、大火傷を負うところでした。原爆が落ちたとは理解できず、一瞬暗闇になり、少しじっとしていたら辺りが見えてきて、電車の乗客が「逃げよう」と言いだし、小学校に逃げることになりました。友人と一緒に己斐小学校に避難しかけましたが、黒い雨

が降って来たので宮島線を歩いて五日市の自宅に帰ることにしました。井口あたりで気分が少し落ち着いたので、海で黒くなった顔を洗いました。

福島町から帰る途中で、服が張り裂けて肌が露わになった女の人や、身体が腫れてパンパンになっている男の人をたくさん見かけました。馬も膨れて腫れあがって、ひっくり返っていました。その後、何日か過ぎて会社（土橋）の同僚を探すために入市しましたが、会社にいた同僚は死亡していました。

あの日、私は腹痛により出勤が遅くなったため、運が良かったといえば良かったのかもしれません。大した怪我もなかったのですから・・・。今は八十八才です。幸せです。

相生橋北側歩道西に向って

手前の雨水枡は、水面に反射した爆風により歩道から飛び出した。北側車道と歩道の間は爆風の影響で最大1．4mもズレを生じた。広島電鉄市内電車は、相生橋西詰め軌道復旧工事も終え、市内電車の運行がみうけられる。

（林　重男氏撮影／広島平和記念資料館提供）

忘れられない夏

津田玲子（八十二歳）

被爆地……入市（八月八日・江波）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……叔母
現在の病状……高血圧症・動脈硬化症・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

私たち家族は当時、高田郡美土里町に住んでいました。十一歳の小学生だった私は夏休みに入っていましたが、あの日はちょうど登校日でした。

登校中、目の前の山の間から、突如真っ黒い雲が立ち上がるのが見えて驚きました。私の目に映った、はるか遠くに落ちた、原爆投下の光景でした。

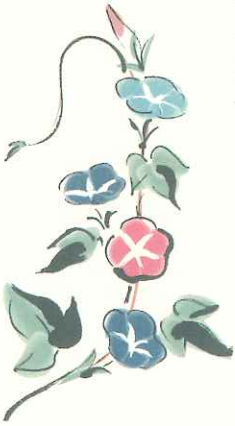
家族は無事でしたが、広島市内胡町にあった高尾理髪店に叔母が住み込みで働いており、安否不明となりました。叔母の安否確認の為、父と親族と一緒に市内に入った

のは八月八日でした。その日は江波の伯父の家に泊まり、翌日胡町のお店を目指しました。

そこで見つけたのは、叔母の死亡を知らせるメモでした。失意のどん底でしたが、坂小学校に遺体があるという知らせがあり、そこへ向かいました。

叔母を引き取りに行くと、そこにはまだ息のある叔母の姿がありました。しかしながら、その姿は、背中全体に大火傷を負っていて、言葉には表し難い状況でした。そんな叔母を引き取り、小学校の近所で戸板を借り、それに叔母を乗せ汽車で美土里町まで帰りました。しかしながら、物資不足であったこともあり、看護の甲斐なく終戦放送の翌日の十六日亡くなってしまいました。

今は、縁あって舟入むつみ園で穏やかな日々を過ごしております。しかしながら、幼き当時の記憶は、いまだ恐ろしい記憶として残っています。



私の被爆体験記

坪石智子（八十八歳）

被　爆　地……小網町（爆心地より〇・八km）
当時の急性症状……吐き気・下痢
家族の死亡……母・兄・弟
現在の病状……高血圧症・慢性肝炎

被爆時の状況及びその後の生活

十八歳の夏、当時は、段原末広町に家族五人で住んでいました。私は、日本通運に勤めていました。八月六日の朝七時頃に、電車に乗って、課長に頼まれた石鹸を貰いに、小網町の石鹸問屋へ行きました。店に入ると同時に、すごい光とともに爆弾が炸裂し、私は爆風で倒されて、目の前が真っ暗闇となり、何も見えませんでした。足の上には柱が倒れており、身動き出来ませんでした。「助けて下さい！助けて下さい！」と大声で叫んだら、三人の兵隊さんが入ってきて、ジャッキで柱を退けて下さいました。「ありがとう、ありがとう」と言って足を見たら、膝から血が流れ、中の骨まで見え

ていたので、兵隊さんが足を縛って下さいました。
眼にはゴミや埃がいっぱい入って、拭いても、拭いてもよく見えませんでした。眼を開けても痛いので、観音の鉄橋近くの石段を降りて、川の水で顔を洗い、少し休みました。
目の前の川の中には、子供や大人が死んでいて、火傷や怪我をした人が、後から後から川へ入ってきました。
そのうち、日赤で働いている妹のことが心配になり行ってみると、日赤の門の両方に死体が山ほど置かれていました。探していた妹は、頬にガラスの破片が沢山刺さり、血だらけでした。今でも、小さいガラスが出て来るそうです。
家に帰ると、母が一人でポツンと座っていました。家の中は、畳も柱も皆飛んでいき、大きな柱以外は何も無いありさまでした。母は、その様子を見て、「ここにはもう住めないね」と言いました。
今は、ここ舟入むつみ園で、平穏に過ごしています。今この豊かな時代に生きていても、当時のことを思い出します。平和学習に来られる学生さんに話をしていると、涙が出てきます。今は、妹と二人きりになりましたが、お陰様で八十八歳まで生きさせて頂き、ありがとうございます。命を大事にする、平和で核の無い世の中になりますよう願っています。

家族を亡くした悲しみ

得井　壽美恵（八十四歳）

被　爆　地……楠木町（爆心地より二・〇㎞）
当時の急性症状……全身打撲による内出血
家族の死亡……母・弟・妹
現在の病状……C型慢性肝炎・白内障　高血圧症・高脂血症・緑内障

被爆時の状況及びその後の生活

私は当時十四才（女学校三年生）で、家族八人と楠木町に住んでいました。

八月六日の朝、私は学徒動員が休みだったので、家に居た時に、原爆に遭いました。その時、私は家の下敷きになりましたが、近所の人達が助けてくれました。全身打撲をし、内出血の青あざは約三年消えませんでした。

助けられた私は、何とか無事だった七才と五才の妹と三才の弟を連れて、新庄町の竹やぶまで避難しました。途中、全身火傷の人や皮膚の垂れた人が大勢いて、辺り一面

そこら中、火の海でした。夜は一晩中、人のうめき声が聞こえ、朝起きてみると、死んだ人がたくさんいました。

私達は、「何かあったら、楠木町の者は安の方に避難するように」と父から聞かされていたので、そこへ行ってみると、軍事工場の仕事をしていて無事だった父と出会うことができました。

八月六日、母と八ヶ月の妹は白島のお寺に行く途中で原爆に遭い、亡くなっていました。

中学一年生ですぐ下の弟は、建物の取り壊しを手伝う建物疎開に行っていて原爆に遭い、父が探しに行ったのですが、全く消息がつかめませんでした。それから十年後に、行方不明者の名簿に弟の名前が載っていて、やっと遺骨が戻ってきました。

長女の私が母親代わりになり、妹や弟たちの面倒をみました。おばの家に暫く住んでいた時に、三才の弟が駅で母親を待ち続ける姿は可哀相でなりませんでした。

家族が亡くなる辛さ、残された家族の悲しみは言いがたいものがあり、誰にも私と同じ体験をしてほしくありません。

今は、むつみ園に入園し、平和学習のために来た生徒さんを見ると、弟のことが思い出されて、体験した話をすることができません。時間が経てば話せる日が来るかもしれませんが、今はまだ無理です。戦争のない平和な世界を祈るばかりです。

原爆の恐ろしさ

中　壽美子（七十四歳）

被　爆　地……段原新町（爆心地より二・三㎞）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……胃癌・B型慢性肝炎・両変形性股関節症・腸閉塞

被爆時の状況及びその後の生活

当時、三菱重工に勤める両親、比治山女学校に通う姉に囲まれた家庭で可愛がられていた私は、まだあどけない四歳の幼子でした。

そんな普通の家庭でも、十九歳の兄が、特攻隊員として戦地に赴いたといったような、戦争の影を感じる生活を送っていました。

あの時の私は、食事を済ませ、庭で遊んでいました。八時十五分、「ピカッ」と光ったかと思うと、大きな音と共に白煙がモクモクと立ち昇りました。

幸いにも私の住んでいた段原新町は、比治山の陰にあったため、比較的家屋等の被害が少ない地域でした。しかし、爆風でガラスが割れるなどの被害もあり、母は、左手にガラスが突き刺ささり、負傷していました。

私は、必死に呼ぶ母の声を聞きながら、手を引かれて、一生懸命逃げたことを強く覚えています。

その後のことは、覚えがありません。母も話してくれませんでした。父も姉も生きて会え、兄も特攻することなく、再会することができました。

しかしながら、被爆したことを知られると何かと差し支える時代でしたので、若かった私には、何かと不都合なことに付きまとわれながらの生活でした。

戦争は、後にも暗い影を残してしまうものです。

最近になり、三度も大病と闘うことになり、何とか病を潜り抜けてきました。

舟入むつみ園に入園できたことを有難く思いながら、残り短い人生の毎日を過ごしています。

私の原爆体験記

中本月見（八十七歳）

被爆地……救護（矢野小学校）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……高血圧症・高脂血症・慢性肝炎

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は矢野姫宮町に住んでおり、十七才でした。若役と言う勤労奉仕隊が近所の婦人方で組織されていました。我が家は、母が早くに亡くなっていた為、いつも私が手伝いに出ていました。

六日の朝も、友達と勤労奉仕に出る予定でしたが、いつも奉仕に出ているから六日は休んで良いと言われ、自宅におりました。

自宅近くで近所の子を抱っこしていたら、突然ピカッと光った後、ドーンと大きな

音が響きました。はっと思い、急いで帰宅しました。

帰宅してしばらくすると、自宅前の学校へ、原爆で傷ついた人々が、次々とトラックで運ばれてきました。それを見て、広島市内で働く十五才の弟のことを思いましたが、安否の確認は出来ませんでした。幸いにも、夕方、弟は無事に歩いて帰ってきました。

私は、自宅前の学校で、負傷者を校内へ運びましたが、ベッドがないので、机をベッド代わりにして寝かせました。湿布も氷もない為、熱さまし代わりにキュウリを切って傷口に貼りました。その日から毎日学校

学校の救護所

かろうじて火災からのがれたが、校舎は爆風で半壊、窓や壁にむしろをおおい、負傷者を収容した。

（陸軍船舶司令部写真班撮影／広島平和記念資料館提供）

での救護が始まり、特に六日の夜から数日間はどんどん人が運ばれ、朝から晩まで救護にあたり、その数は百にも二百にもなりました。軍が救護に来てくれたのは、原爆投下から何日か経ってからでした。

私たちは、食事の介助や、肩を貸してあるいは二〜三人で両脇、背中を支えてトイレまで付き添ったり、寝たままの人の排泄も手伝いました。

死者が出ると、校庭へ運び火葬していました。日中に火葬していましたが、夜になっても臭いが残り、鼻について離れませんでした。

また、金歯を入れた人が亡くなった際には、夜に金歯が暗闇で光り、恐い思いをしました。今でも、金歯を見ると、それが思い出されて怖くて仕方ありません。八月いっぱいまで、校内で救護にあたりました。そのうちに、自力で帰れる人や、迎えが来る人で、徐々に人数が減っていき、私もいつしか学校から足が遠のいていきました。

あの頃を思えば、今は極楽。むつみ園にも入れて、ゆっくりと好きなことができる今が一番幸せです。

八月六日という日は私の心の中の癒えない傷

西田　カズエ（八十七歳）

被　爆　地……入市（十日市町・八月七日）
当時の急性症状……下痢
家族の死亡……なし
現在の病状……高血圧症・不整脈

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は可部町上市の県貨物自動車に勤めていました。

八月六日の朝八時過ぎ、稲光のような閃光で空が明るくなり、ドーンと大きな音がし、暫くすると広島の方角の空に黒い入道雲のような煙が見えました。

皆、驚いて広島に爆弾が落されたのだろうと騒いでいる時に、上空に大きなドラム缶のような物を下げた落下傘が落ちてくるのが見えました。大勢の町内の人が竹槍を持って確認に行きましたが、誰もどこに落ちたのか、何だったのか、全くわかりませ

んでした。戦時中なので新聞やラジオでも公表されず、何だったのか知らされることはありませんでした。

会社のトラックが広島に行っていると聞いたので、上司と同僚三人で別のトラックに乗り、そのトラックを探しに行きました。

新庄まで行き、そこからは徒歩で十日市方面に向かいました。

その途中、水槽に顔をつけ死んでいる人がいました。さらに行くと、横川橋のたもとでは、服が破れ、髪も服も埃とゴミで、男女の区別がつかないほど大きく腫れた顔の人達が、並べて寝かされていました。馬も、真っ黒になり大きな腹をして死んでいました。

市内の家は全部くすぶっていたので、大通りしか歩けない状態でした。結局、会社のトラックは見つからず、新庄に帰ることにしました。

帰る途中、逃げ遅れた人達が横川方面に向かってゾロゾロと歩いていました。それは、幽霊のように両手を前に垂らしていました。ボロボロの服が垂れているのかと思えば、ヤケドで自分の手の皮がぶらさがっていました。足も同じように皮をぞろぞろと引きずっていました。また、顔もヤケドで真っ黒になり、大きく腫れて目も開けているのかわからないほどでした。

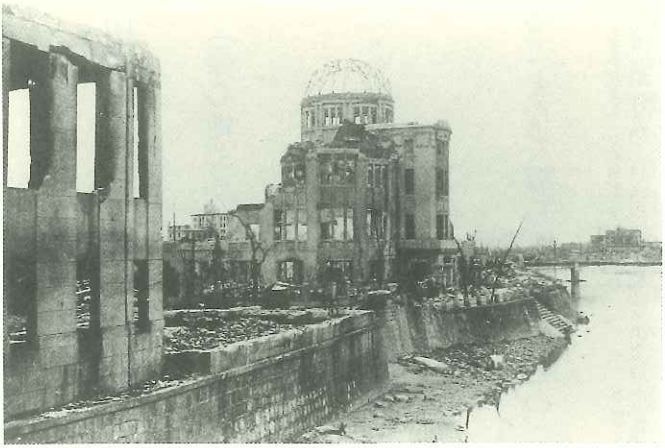
それを見た時、この世の地獄のように思いました。私達は無言で歩き、新庄からトラックに乗りました。

あの時ゾロゾロ歩いていた人達は生きておられることはないと思うと、酷く悲惨に思われてなりません。

ピカドンで広島の灰になられた人は、会社でも何人かおられます。戦争の怖さ、ピカドンの恐ろしさは、今でもはっきり残っています。

相生橋から広島県産業奨励館（原爆ドーム）

相生橋東詰（左岸側）から南南東に向って。左手前に日本赤十字社広島支部の残骸が見え、その右建物の基礎だけになった所は全焼全壊した同支部の木造建物跡。中央部には広島県産業奨励館（原爆ドーム）、その右奥の建物群は袋町電車道りの明治生命広島支店、広島富国館など。右端元安川の奥は広島市役所など、その手前の橋は元安橋。元安川の花崗岩の石垣は火災で黒く焼けた跡が残り、潮の干いた河原には瓦礫の散乱した様子が見られる。
（尾木正己氏撮影／広島平和記念資料館提供）



幼き記憶

藤田春江（七十四歳）

被　爆　地……矢賀町（爆心地より三・八km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……父
現在の病状……統合失調症・右脛骨内軟骨腫・両変形性膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、四歳の私は、八人家族で、戦時下でも困窮することなく暮らしていたとのことでした。

幼かった私には、あまり記憶は無いのですが、あの日研屋町の中国配電で父が被爆し、焼死してしまいました。早く父を探そうとしたのですが、火災がひどく近づけなかったとのことでした。

八日になってようやく、仕事場のデスク付近で逃げられず、そのまま息絶えた父と

対面することができたそうです。当時、母は弟を身籠っており、弟を見ること無く亡くなった父の無念はさぞかしのことと思います。

その後、働き手を失った家族の生活は困窮したのですが、学校には通うことは出来ました。

しかし、高校卒業間近になってから、私は原因不明の病に苦しめられました。様々な病気に苦しめられ、長い年月を過ごしました。これらは、心因性の原因が大きかったようです。こんなになったのも、父の無念さが、私に宿っているのではと考えました。それからというもの、治療と並行し、仏壇などに供物を供え、父の霊を弔うことをいたしました。そうすることにより、程なく病も快方に向かい、現在に至っています。

戦後、長い月日が経った今でも、あの日の出来事は人々の心を蝕み続けています。幼いころの記憶ですら、消え去ることはないのです。体の傷は癒えたとしても、私のように傷ついた心を癒すには、長い時間が必要でしょう。

あのような愚かな出来事が、もう二度と起こることのないよう願ってやみません。

兄弟を看護して

藤原　サヤコ（八十七歳）

被　爆　地……救護（矢野小学校）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……慢性胃炎・C型肝炎・骨粗鬆症

被爆時の状況及びその後の生活

当時の私は十七歳で、両親はすでにこの世にはなく、九人兄弟の家長となった長男夫婦の元に、他の兄弟と共に身を寄せていました。

私は、自宅でその時を迎えました。

正午頃から、歩行可能な被爆者や東洋工業を通って搬送された方が、どんどん矢野小学校に送り込まれてきました。各部屋にゴザを敷き、兄嫁と近所の者と共に救護に当たりました。

折から、勤労奉仕の帰途にあった兄と弟は、比治山近くで被爆し、上半身が焼けただれた状態で小学校へ戻ってきました。特に胸部・顔面のただれがひどく、血が噴き出しており、それをガーゼやタオルで拭き取り、胡瓜等を切って傷にあてて冷やしながら、どくだみ草等を煎じて飲ませました。また、翌日、軍から届いた油薬を塗ったりしました。

身寄りのない不明者は、救護が遅れ、体にウジ虫が発生し、とても悲惨な生き地獄の様子でした。小学校には二百名余りの人が収容され、その中には親戚・知人もいました。そうした中、私と兄嫁は、親戚・知人と、わけ隔てなく多くの人の救護に当たり、また、多くの人の看取もしました。

救護は、小学校で二十五日間位行われ、その後、自宅で兄弟の看護を五十日間位に亘って続けました。

今でもそのときを思うと、よくもまあ何とか助かってくれたものだと思います。

九人いた兄弟も、戦後を共に生きてきましたが、相次いで亡くなり、今では、八十歳になる弟と二人きりとなってしまいました。

私は、縁あって舟入むつみ園に入ることが出来ました。今は、楽天家な性格もあり、楽しい日々を過ごしております。このような日々が、皆様に長く続きますよう願って止みません。

私の原爆体験記

藤原　照子（九十二歳）

被　爆　地……入市（八月七日・八丁堀）
当時の急性症状……下痢・発熱
家族の死亡……父・二人の妹
現在の病状……高血圧症・狭心症・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、私は当時二十二歳で、海田の陸軍航空補給廠で、筆生（事務職）をしていました。

当日の朝、空襲警報が解除となり事務所へ入った途端、ピカーッと光りドーンと大きな音がして、ガラスが飛び散り、思わず床に伏せました。幸いなことに、私は怪我をしていませんでした。

それから、部隊のテントでは「広島がやられた」とか、「広島はだめだぞ、諦めん

といけん」という声が聞こえてきて、恐ろしくなりました。広島の方を見ると、むくむくと不気味な白い雲が広がり、ただ茫然と眺めるだけでした。

そのうち、広島の方から、ぼろを下げたような人達が大勢こちらへ逃げて来られ、近くで見るとぼろだと思ったのは皮膚がぶら下がった姿でした。その晩は、部隊に泊まるよう言われたので、広島にいる父や弟、妹達がどうしているか気がかりでなりませんでした。

翌朝、トラックに乗せてもらって、家がある八丁堀へ向かい、一人で家族を探しました。途中、黒こげの死体、赤黒い半焼けの死体、水ぶくれで腫れ上がった死体など幾つもの死体が無残に転がっていて、その光景は世にも恐ろしい地獄絵図でした。

我が家と思われる所では、松の木が焼け焦げ、水道管が破裂して、水が噴き出ていました。私は、放射能が含まれている水とは思わず、喉の渇きを潤すために、噴き出る水を飲みました。台所があった所には、朝炊いた御飯が釜の中で黒焦げになっていました。

父や弟、妹達はどうしたのか、誰ひとり人影はありませんでした。

それから私は、母が疎開していた安芸中野に歩いて行きました。そこには、逃げ延びて無事だった弟がいました。

次の日から、父と妹達を探して歩き回りました。死体に被せてあるむしろに書かれた名前を見ながら、ひとつひとつむしろをはぐり、顔を見て回りましたが、見つかりませんでした。

道端では、むしろの下の死体を次々とつるはしで、トラックの荷台に投げ入れていました。

家の焼け跡をスコップで掘りおこし、父のものらしき金歯を見つけたので、ここに父がいたと信じるしかありませんでした。

末の妹は、近所の方に見つけていただき、ようやく戻ってきましたが、ひどい下痢が続き、髪の毛は抜けて坊主頭になりました。やがて、身体はどす黒くなり、おかしな斑点が出てきて、八月二十八日、「あぁ、すずめが止まっている」と言いながら、息を引き取りました。あの日、仕事に出たもう一人の妹は、消息を絶ったまま二度と戻ってくることはありませんでした。

その後、私は家の家業を手伝いながら結婚して、子供二人に恵まれました。

今は、むつみ園で穏やかに生活させてもらっています。再びあの惨状が起こらないように、平和を祈っています。

私の体験記

前原信子（八十四歳）

被爆地……救護（井原の隔離病舎）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……叔母
現在の病状……甲状腺機能低下症・膠原病・心房細動

被爆時の状況及びその後の生活

私は、昭和二十年四月、十四歳で、宇品にあった広島逓信講習所に入学しました。空襲の時、寄宿舎の食堂に爆弾の破片が飛んで来たこともありました。五月中旬頃、私達のクラスは、井原（現在の白木町）のお寺に疎開しました。

八月六日の朝、ピカッと光り、雷のような音がしました。少し時間が経ち、広島で大変なことになったと聞き、井原駅に行ってみました。沢山の怪我人が降りて来られましたが、その時は、自力で帰った人が多く、大怪我の方は、あまり見かけませんで

した。

あくる日の七日に、講習所の先生が怪我をされて、井原の隔離病舎に運ばれて来られました。看病に行くようにと、担任の先生から申し付けられ、級長さんと副級長の私と二人で行きました。

怪我をされた先生は、若い女性の方でした。先生の身内の方は見えず、付添いは、私達二人だけでした。先生は、寝たきりで、意識があったかどうか、話をしたかどうか、子供だったのでよく覚えていません。ただ二人で付添っていただけだったような気がします。

病舎は、ベッドもなく、怪我人がぎっしりいて足の踏み場もない程でしたが、医者の姿は見えなかったように思います。先生は、三日か四日して家に帰られ、後日、亡くなったと聞きました。

病舎にいた怪我人のうち、今でも心に残っているのは、私より少し年下位の女の子が、山口の方言で「お母さん、せんないよ、せんないよ」といって、泣いていたことです。

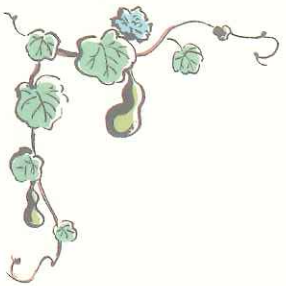
また、顔中が真っ赤に腫れ、口と目と鼻が穴だけになった人もいました。さらに、皆が横になっている中で、背中の皮が半分垂れ下がり、背中に女性の首の刺青が彫っ

てある男の人が一人座っていました。

怪我人は、毎日何人も亡くなられました。病舎の上の方に焼き場があり、毎日毎日一日中、煙が上がっていました。十四歳の時の記憶ですが、思い出すと今でも涙が出て困ります。

先生の看病で一緒だった級長さんは、健康に過ごしていましたが、今年三月二十八日に心筋梗塞で急死されました。

私は、平成二十五年に、長く待って「舟入むつみ園」に入園できました。職員の皆様に優しくしていただき幸せです。朝は、汐の香りがほのかに漂う川のほとりの散歩道を、四十分歩いています。同級生もだんだん少なくなりましたが、できるだけ元気で生きていきたいと思います。



八月六日は忘れられない日

矢口　ハヤメ（九十七歳）

被爆地……祇園町（爆心地より四・一km）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……義兄
現在の病状……高血圧症・めまい

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は二十八歳で、九歳だった長女を疎開に出し、母と次女（六歳）、長男（四歳）、三女（約一歳）と、祇園町で呉服の針仕事をしながら暮らしていました。主人は戦地に行ったままでした。（後に戦死）

八月六日は、朝から家の前で、三女をおんぶして洗濯物を干していました。何かピカッと光り、間なくドスンと大きな音がして、風に吹き飛ばされそうになり家に入りました。

家に入ると、家具が倒れ、屋根が浮き上がっていて、大変なことになっていました。
さっきまで家の中で遊んでいた子供たちの姿がどこにもなく、心配で探すと、裏庭で声がしました。子供たちは、畑まで吹き飛ばされた畳の上敷に巻かれて、泣いていましたが、幸いなことに、怪我はありませんでした。家の中で御飯を食べていた母は、ガラスで腕を怪我していたので、すぐに病院に行かせました。
外に出た時、空を見上げると、今まで見たことがない高い高い煙が上がっていました。それは、ワクワク吹き上がる大変な形をしたものでした。その時、私は、「あの下にいる広島の人はいったいどうなったんだろう」と心配で何をする気も起きませんでした。それが、「原子爆弾」だと分かったのは後のことです。
母が病院から帰ってきて、「この位の傷は診てもらえない。もっともっとひどい人が沢山来られたので帰ってきた」と言いました。
昼から私は、義理の姉が大芝町に住んでいたので心配になり、子供二人を母に預け、三女をおぶって大芝町へ向いました。義理の姉は無事でしたが、夕方帰ってきた義理の兄は、全身火傷と怪我で、三日後に亡くなりました。甥は、左顔から首、背中にガラスがささりひどい傷でした。私は、毎日、甥の看病に行き、傷に湧く蛆を取ってあげたりしました。
家の前の大芝公園では、悲惨な状況を目にしました。そこは、人がいっぱいで、いろんな人の声がしました。親が子を呼ぶ声、子が親を呼ぶ声、そして泣き声。

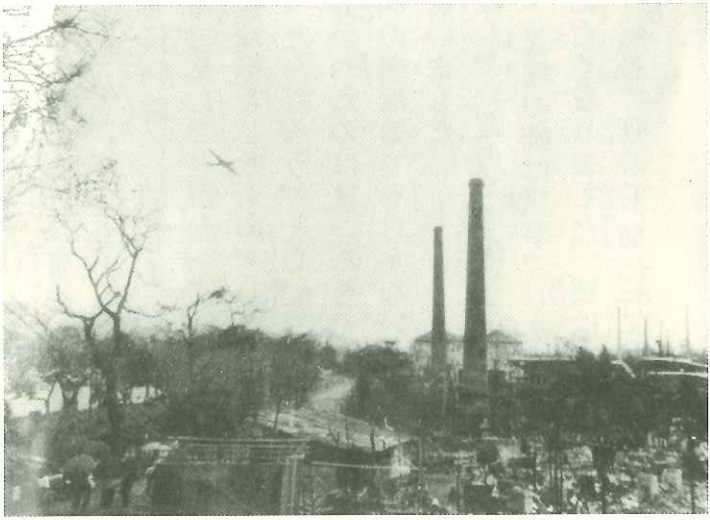
死んだ子供が箱に入れられて、川辺に並べて焼かれていました。私にも同じ位の子供がいたので何と言っていいのか、気の毒でかわいそうで辛かったです。私は、今でもあの場面が浮かび、あの声が耳に残り、涙が出ます。

爆風で家が傾き、女と子供ばかりで不安でしたが、その後は何とか生活しました。

大変だったけど戦争もなくなり、平和に過ごせることが何よりでした。

どんなに物が不足しても平和な世が一番良いです。

今は娘達を頼りにして、むつみ園で生活できることが幸せです。



大芝町大芝公園付近から

米軍によるDDTの散布？を自宅2階から、崇徳中学校講堂方向に撮影。煙突は飯田染工場。後方煙突は加土染工場。楠木町四丁目太田川沿い大芝公園土手に向って（南東方向）。

（深田敏夫氏撮影／広島平和記念資料館提供）

原爆によせて

吉川　胡子（八十四歳）

被　爆　地……入市（八月十二日・東白島町）
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし
現在の病状……甲状腺機能低下症・高血圧症・心肥大

被爆時の状況及びその後の生活

昭和二十年八月六日、私は十四歳で、学徒動員として西条の賀茂高等女学校の被服廠へ登校していました。八時十五分、ピカッと稲光のような光を感じました。何日か後に、学校のラジオを聞いて、それが原子爆弾だったとわかりました。

六日は一日中、被爆された方が次々と西条駅へ帰って来られ、多くの家族も駅で身内を探し求めていたため、大変な混雑でした。

それから一週間過ぎた頃に、私は学校から東白島の逓信病院で一週間救護をするよ

うに言われ、広島市内に入りました。逓信病院には、多くの被爆された方が収容され、床の上に並べて寝かされていました。火傷をされて赤い身が出ている方には、赤チンで消毒し、ガーゼを覆うなどしました。亡くなられた方は、近くの広場に運ばれ、油を掛けて火葬されていました。

その後、一度家に帰ってみると、母のいとこが蚊帳を吊った中に寝ていて、身体の全体が真っ黒に焼け爛れて、体には蛆が湧き、悪臭がしていました。

次に、大河の小学校に一週間程、逓信病院の時と同じように救護に行きました。小学校には食器がなかったので、缶詰の空缶を拾って来て、その中へお粥を入れて食事を配りました。

また、西条にあった結核療養所が原爆に遭われた人の収容所になり、どんどん運んで来られる光景は壮絶で、この世の地獄でした。

救護に当たった私達は、直接原子爆弾を受けてはいませんが、友人の中には、二週間の看護の後、高熱を出す人、頭の髪が全部抜け、長く休む者もいました。

このような戦争はしてはいけません。今、世界中でテロがありますが、絶対してはいけません。今は、むつみ園に入園させていただき、本当に幸せです。いつまでも平和が続くことを強く強く願っています。

平和は尊いこと

吉田寅夫（八十九歳）

被　爆　地……千田町（爆心地より二・〇㎞）
当時の急性症状……怪我（背中・足）
家族の死亡……なし
現在の病状……糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

その当時、私は、日赤病院北病棟3階に入院していました。B29の警報が解除になり、カーテンを開け、窓際で友人と立って話をしながら、B29が遠くへ飛んで行くのを見ていました。

友人がふと屈んだ時、私は爆風で吹き飛ばされ、気を失いました。気が付いたら、私は病室内の窓際から十メートル以上吹き飛ばされ、壁にぶつかっていました。背中や足には、ガラスの破片が八十個ほど刺さっていました。友人が私を背負い、下の階

まで降ろしてくれ、治療を受けて出血を止めました。

病院の周りは、一面火の海で、焼けなかった建物は、日赤病院ぐらいでした。病院には、足に釘やガラスが刺さっても歩いてくる人々が玄関に倒れ込み、水を求めながら死んでいきました。他にも、いろんな人々が運ばれてきて、治療を受けるために廊下へ寝かされていました。夜中には、「痛い」「助けて」など、いろんな声が聞こえ、声が聞こえなくなったら、亡くなっておりました。その人達は、宇品に運ばれて火葬されていました。

私は十二月に退院し、実家へ帰る途中、横川を歩いていると、似島まで見渡せる程の焼野原だったことを覚えています。

戦争は絶対にしてはならないことで、今の若い人たちには、もっと戦争に関心を持ってもらいたい。実際に目で見ないとわからないこともたくさんあり、戦争で何百万人が死んでいます。

今、戦争をしても止むを得ないという風潮がありますが、とんでもないことです。私達が今、こうして平和に生きていられるのは、とても尊いことなのです。